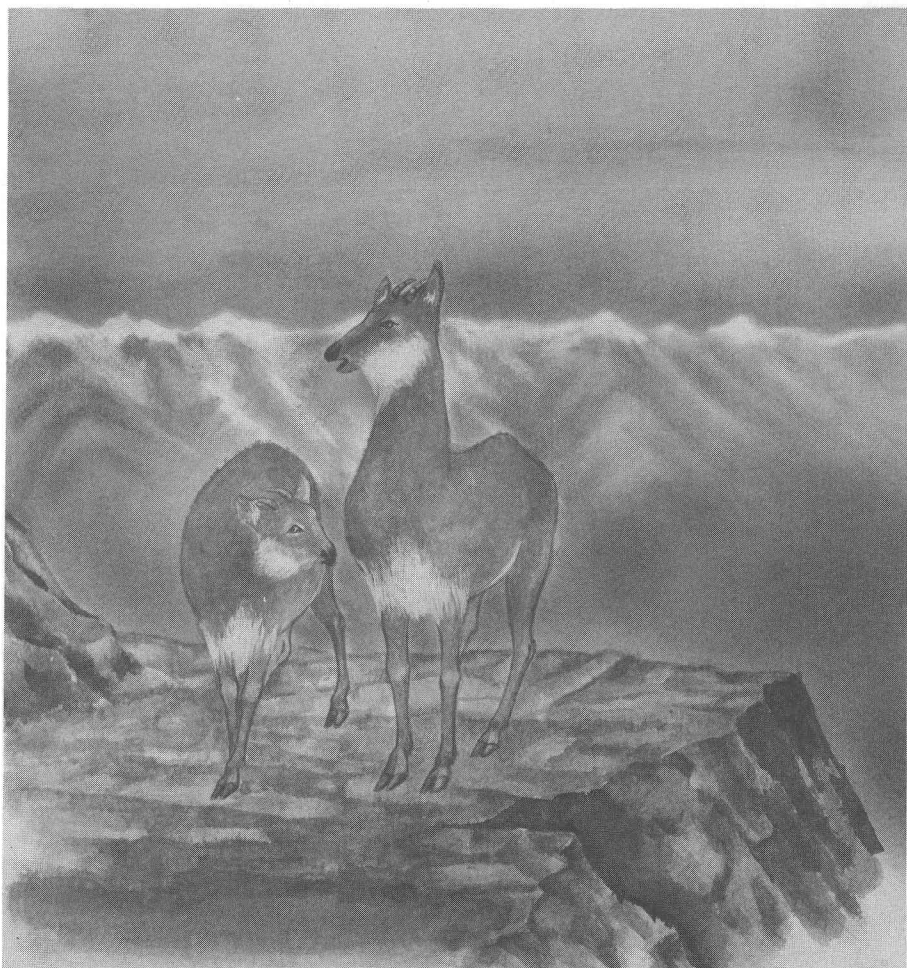


季刊 連句 第35号

平成三年立机式特集号



季刊連句 第35号 目次
平成三年立機式特集号

立機式雑感（南柏雑記 33）	1
立機三宗匠の略歴と紹介	2
三宗匠捌による歌仙三巻	4
賛・新宗匠	6
羅浮亭正江宗匠……草間時彦・加藤慶二	
行々子庵平朗宗匠……水澤魚乙・木村聖哉	
桃径庵和子宗匠……近松寿子・品川鈴子	
挨拶 秋元正江・杉江平朗・式田和子	9

恋句の作り方味わい方	東 明 雅	10
------------	-------	----

第十一回俳諧芭蕉忌	第三十九回 猫蓑会	18
正式俳諧興行	協起り二十韻 捌 式田和子	
二十韻八巻	捌 金久保淑子・蒲原志げ子・小林 千雪	
	篠原 達子・瀧川 雅代・八角 澄子	
	本屋 良子・山口みづゑ	

「蓑虫」付勝練習二十韻	22
「房連庵の連句」について	福 井 隆 秀 24
歌仙 萩の風	捌・文 式 田 和 子 26
第三回全国連句新庄大会	文 秋 元 正 江 28
雁帛往来	29
新刊紹介	21

立机式雑感

南柏雑誌 33

雅

A・C・C連句講座（実作と理論）は、昭和五十六年四月に誕生した。正確に言うならば、当初の講座名は「連句・作法と鑑賞」であった。月二回、水曜日の午後一時から三時までは、この十余年間ずっと変わらない。

次の年には、「芭蕉七部集鑑賞」という講座を午前十時から十二時まで設け、午後は一時から三時までを「連句実作入門」と、二本立ての講義をやったこともあった。午前の講義が終ってすぐ四十九階のお店に行き、皆で昼食を仲よく食べた思い出は楽しいけれども、午前の講義が何かの都合ですこし遅れると、食堂は混んで来て、やっこの思いで昼飯をすまずというようなことも度々であった。当時はまだ若いと思っていたからよく頑張ったものだが、聴講された方はさぞ御苦勞されたであろう。そして、いつしか現在の形、二時間のうち、初めの一時間は私の講義、そして続く一時間は秋元講師の実作というスタイルが完成した。

一方、猫蓑会は昭和五十七年四月の発足である。毎年四月・七月・十月・一月の四回、一回も欠かしたことなく、いろいろの行事をして来たことは、「季刊連句」第二十四号の秋元さんの文章「猫蓑会おぼえ書」に詳細に記録され

ている通りであり、ことに昭和六十一年十月からは正式俳諧の興行に踏み切り、秋は芭蕉忌を、春は亀戸天神藤祭りをつとめていることも皆さん御存知の通りである。

私は昭和三十六年に、信州松本で根津芦丈先生に教えを受けて以来、先生の素志をつぎ、正しい俳諧を世に弘めようと念願して来たのであるが、十一年前、柏に住んで、A・C・Cの講座をひらき、猫蓑会を作って教えるようになってから、いささか斯界に貢献し得たであろうと思うようになった。

そして、それとともに、この十年余、A・C・Cや猫蓑会において、連句の神髄を体得し、他人様に対しても教えることの出来ること認められ、会の発展に寄与された方々に対して、何かその顕彰と感謝の気持をあらわしたいと考えた末、まずはじめに秋元正江さん・杉江杉亭さん・式田和子さんのお三人に文台を差し上げようと決心したのが、今年の四月のことであった。

幸いに皆さんの御賛同を得、猫蓑会主催、猫蓑同人会後援で、盛大に立机式が舉行されることになっているのは、大変うれしいことである。立机式事務局の中川哲さん、豊田好敏さんをはじめ、すべての猫蓑会員の方々に厚くお礼を申し上げ、兼ねて、立机された新宗匠お三人が、今後さらに会員と協力され、猫蓑会の発展、ひいては正しい俳諧の普及の先導となられるよう期待するものである。

平成三年立机三宗匠の略歴と紹介 立机式実行委員文責

羅浮亭正江宗匠



本名 秋元 正江
住所 東京都足立区綾瀬

四ノ一九ノ一七ノ二〇九
電話 〇三二三六二八一五〇七八

東京生れ。都立第一高女卒業。都立第五専攻科中退。昭和四十九年、朝日カルチャーで加藤楸邨先生のご指導をうけ、平成二年「寒雷」同人。

朝日カルチャーセンターで東明雅先生の「連句の実作と理論」の講座が始まると第一期生として入門。十一年のキヤリアから、今では明雅先生の片腕となり、同センターの講師として実作の指導に当たっていられる。そして「猫蓑会」

行々子庵平朗宗匠



本名 杉江 平朗
住所 東京都三鷹市井の頭

二ノ二六ノ三〇
電話 〇四二二一四四一五九〇五

「猫蓑同人会」理事、「連句協会」常任理事としてご活躍の昨今である。庵号「羅浮亭」の由来は、湯島にある正江宗匠のお宅の茶室を、古来、梅の名所として名高い中国の羅山・浮山に因んで、明雅先生が「羅浮亭」と命名されたのを戴いたとか；更に事典によれば、梅花の精、清楚な美女という意味もあるという。

羅浮亭正江宗匠のお捌きは、連衆を倦ますことなく巧みに乗せて、連句の楽しさ面白さに没頭させる特技がおりになる。まさにこれが匠（たくみ）の天性ではあるまいかと思われる。

正江宗匠は著作として「文音往来」のみとされているが、「寒雷」の秀句や各大会で受賞された連句をまとめて、やがて素晴らしい著作を出されることであろう。

愛知県生れ。早稲田大学卒業。大企業の広報担当として活躍。その頃の人脈が平朗宗匠の今日を、より一層豊かなものにしていくといわれる。

連句歴は約十年。「猫蓑会」「猫蓑同人会」の顧問。昭和六十二年に連句集「井の頭」を出版。赤い表紙のシヤレ

た作品集である。

実作においては、かつて「脇」の「杉亭さん」と持て囃されたことがあった。発句を見据えて付ける勘所が、ひときわ群を抜いておられたからとか。

杉亭と号されたいきさつは、杉山杉風と渋沢渋亭(秀雄)両氏の響みに做ったと承ったことがある。

行々子庵宗匠で欠かせないのが酒と旅行。酒はあくまでも年間を通して日本酒の冷。肴は和風をもって可とするが、

鶏と蕎麦とは酒に付かぬと採っていただけない。旅行は諸外国の名だたる国はあらかた訪ね、国内は歴史ある街の由緒正しい和風旅館がお好みである。

そして隠れたご趣味がなんとスポーツ。水泳はかつて遠泳に自信がおりだったとか。今は近くのスイミングクラブで気ままに泳がれている。そしてスキー、スケートも昔の話、今ではもっぱら深夜テレビで、テニス、ラクビー、ゴルフの世界タイトル戦を楽しんでおられる。

桃径庵和子宗匠



本名 式田 和子

住所 東京都杉並区桃井

二ノ一四ノ五

電話 〇三―三三九〇―四四四六

東京生れ。府立第三高女卒業。二男、一女。昭和四十四年大宅壮一マスコミ塾に入り、六期を終了。以後、婦人誌等で、生活、冠婚葬祭、老人問題等の評論を手がけている。著書に「現代日本婦女鑑」(婦人生活社)「しきたり救急箱」(扶桑社)「女性のための冠婚葬祭入門」(三笠書房)「老人の看護をした主婦の話」(おばあさんの暮し今・昔) (共に文化出版局) 他多数。主婦の投稿生活情報誌「月刊」

くらしの研究」編集長。

連句歴は約十年。「猫蓑会」「猫蓑同人会」理事。「連句協会」理事。福井隆秀、秋元正江氏との連句集「文音往来」を昭和六十年、むなぐるま草紙同人社から出版された。実作においては、博覧強記の脳髓から、ある時は格調高く、ある時は俗語や日常語を自在に駆使して、独特の軽妙な気分にかけていくという妙手である。

連句のメカニズムは付けと転じであると明雅先生は断言されます。桃径庵新宗匠は広い交友範囲を持ち、ママさんバレエ、歌舞伎、舞踊関係者、雑誌編集者、千社札愛好者等多士済々で、その人々をいつの間にか「連句」に付け、愛好者に転じさせてしまう、という特技の持ち主である。

三宗匠捌による歌仙三卷

祝立机

羅浮亭正江 捌

色も香も紫式部か小式部か

俳諧照らす月の晃々

江鮭煮つめてをりし著先に

にゃんこの眼して遊ぶ子供ら

羽根二つ三つ庇に残りぬて

ショールまとへば遠き潮の音

胸の傷癒さんとして発ちし旅

浮気の虫がちよっかいを出す

うら若きお寺の僧は茶枳尼天

現代宗論使ふファックス

のど越しの良き「菊姫」を呑み過ごし

佐屋の中山水鶏きく夜

着陸の車輪すれすれ夏の月

会員権は紙くづと云ふ

やけ食ひを遂に許せしダイエット

歴代天皇名を諳んずる

御衣黄も鬱金も花の通り抜け

海市の果に笛方の座す

明雅

郁子

正江

千恵子

千町

蓼艸

弘子

水壺

町

恵

郁

雅

艸

和久

弘

恵

雅

艸

秋の聲

行々子庵平朗 捌

杉木立亭々として秋の聲

端座して待つ端正の月

初簾に鳥屋の網戸を直すらん

尾を振りながらついでくる犬

打水の路地賑やかに遊ぶ児等

苺ゼリーを口にすると

ポプリの香アールヌーボー美術館

君の名はとは聞けぬくやしき

「西施」てふ銘柄選び酒を酌み

日本海側沿線の旅

五平餅朴葉麦味噌飛驒訛

ビデオショップで借りる新巻

クリスマスキャロル唱へば月の射し

寒の修行の僧の列ゆく

筆便り達筆金釘とりどりに

借用証の溜る抽斗

もてあます迷子に花の駐在所

山脈遠く聞きし春雷

志げ子

杉亭

好敏

淑子

道子

満子

淑

同

敏

道

良子

志

満

道

志

敏

淑

敏

あけび紫

桃径庵和子 捌

喜の色のあけび紫たぐりけり

路地爽やかに客の挨拶

後の月厨の音も賑やかに

Sのかたち背伸びする猫

湖の細き小橋に佇みて

紙漉き工場求む学生

嵩高な歳暮の品の届けられ

値踏み腕は今もすっかり

下町の女形張りたる目千両

簪かくす坊主煩惱

この頃の機械に弱くためらひて

健康ブーム低き飛び箱

魚籠打ちの銀鱗に月照らすらん

源氏蛭を追ひて沢道

『重大な決意』で落ちた陥し穴

携帯電話便利重宝

花の間ぱっかり泛かぶ熱気球

野外教室うららうららに

和子

健悟

一恵

澄子

哲

好敏

志げ子

恵

悟

哲

志

澄

敏

哲

恵

敏

澄

悟

かいらぎを撫でてさすって暮の春

思ひがけなき入賞の沙汰
親族を呼んだものやら枕元

障子の隅にざしきわらしが
この指の先まで恋しき人ありて

至福の刻は一枚を剥ぐ
徒らに年を重ねし司召

蝦夷地にはただあ秋あかね
月読のサイロに続く道はるか

マラソン選手さげし十字架
踏まれたる縞の財布を拾ひたり

ふうはりとくる薄翅野蜂
マネキンは積み上げられて夏野ゆく

河馬の肉買ふスパーの地下
文庫本の論語に学ぶ処世術

清掃をする名無き裏山
初花にパイプオルガン復元す

風高々と少年の夢
平成三年十月六日

於 関口芭蕉庵
連衆 東 明雅

武田千恵子 原田 千町
川野 蓼艸 市野沢弘子

今宮 水壺 山田 和久
上月 淳子

壺

郁

町

雅

弘

惠

艸

雅

淳

黄塵の港出でゆくフルセール
ニッカポッカの好きな伯父様

伯母様は近頃流行る霊能者
平身低頭狙ふ宰相

腹当をして腹芸の腹見えず
からくり人形組みし祇園会

りえちゃんあの黒子こそ惚れ黒子
ボンネットの中秘めし合鍵

あんまりよ夢中にさせてそれっきり
競馬競輪又も大損

長々と続く高榊格子月
西瓜を買ひにベンツ転がし

来し方は遊糸に似て定めなく
ぱちりぱちりと碁石置く音

割り込みの電話に困る時ありて
踏むな摘まむな小さき物の芽

白寿翁描く醍醐の花大樹
静まる部屋に揺るる春灯

平成三年十月十八日
於 鎌倉おうめさま

連衆 蒲原志げ子 豊田 好敏
金久保淑子 加藤 道子

田村 満子 本屋 良子

淑

敏

志

道

満

道

敏

志

敏

子等寄りて飾る若駒売られゆく
スメタナの『我が祖国』CD

血に飢えた下士官は剣つきつける
凍てし屍にひしと口づけ

八回め年の差なんぞ忘れ果て
はるか野面に夏の鴛鴦

ぐるぐるとクレイン廻り造成中
煙草のみつつ婆の繰り言

看護婦のお尻さすって爺にやり
たぶたぶ揺れる混浴の月

倫敦に記念興行大相撲
夢の倍率籤のすさまじ

神妙に叙勲お受けす紋服で
※山廃仕込み喉ごしのよき

ワープロでこなす稿債文机に
薄き埃の流る逆光

雛会式古き雛の花に映え
自転車置いて春の堤防

平成三年十月十三日
於 式田家

連衆 佛淵 健悟
八角 澄子

豊田 好敏 蒲原志げ子

志

哲

同

敏

哲

惠

志

敏

澄

※山廃は流行の酒の銘柄

お祝

草間時彦

立机、おめでとうございます。日ごろのご努力が実ったわけで、よかったですね。

しかし、ちょっとばかり気になることがあるので申上げさせて下さい。

立机という古典の様式を、現代とどのように調和させるかということが気になるのです。連句が現代に生きる文芸であり、現代人の詩であるならば、矛盾することはないか。矛盾というと大げさですが、キシミが生れるのではないか。そういうことが気になります。そんなこと余計な心配とおっしゃりたいでしょう。どうなのでしょうね。結局、そのキシミは作者の心の裡の問題なのです。秋元正江という作家にとって、そのキシミをどう受取るかということが、私は興味があります。

連句という詩ではまだまだ、いろいろな試みが出来る未来性があるように思っています。そのためには、もっともっとキシミが生れてもよいでしょう。

お祝いが意地悪い言葉になりました。あなたを尊敬すればこそです。お有し下さい。

With Love From Tsukuba

加藤 慶二

(筑波大学教授・ドイツ文学)

秋元正江さんが十二月八日、東明雅先生より立机式をしていただくことになった由。『連句辞典』によれば、この式は「専門的職業人(業俳)として認められる」とある。ドイツの大学制度で言えば「教授資格の授与」であろう。もとより新宿朝日カルチャー教室での講義を受ければ、授与式はむしろ遅過ぎたのではなからうか。しかし連衆の一人としてこれ程嬉しいことはない。

秋元さんに最初にお目にかかったのが十余年前の初夏、俳句文学館で東先生が捌かれた歌仙の六句目に付けられた辰砂の壺に露のこぼるる

が私のノートに記されている。その後、関口にある芭蕉庵や、また猫蓑小旅行や、或いは宴席で一緒にいるが、この掲出句程、俳諧師秋元正江さんを語っているものはない。深奥に秘めたるものを燃やしつつも、表現は静かに謙抑に述べる。そしてその端正な姿勢は決して崩れない。そになんら頼むべきものもなく奉仕すべきものもないことを自覚された詩作への批判的精神が自己自身に確固たる根柢をおいて出発している。

ドイツ語圏では現在「ハイク」が盛んである。「レンク」はまだ先のことであろう。しかし明雅門下からの新しい「師」が更に連句を広め、やがて世界文学になることを念じつつ秋元さんに心から拍手を送りたい。

賢・行々子庵宗匠

「半可仙」からの出発 水澤魚乙

杉江杉亭さんとの付き合いももう二十年の上になる。はじめは仕事上の付き合いだったが、そのおほらかな人柄と、趣味の深さに魅かれ、いつしか親しく深い付き合いとなった。

さて、十年前の春のある宵、杉亭さんと僕はなじみの酒亭で呑みながら、半歌仙を巻いた。杉亭さんはその時が連句についての初体験であり、僕にしては式目といえは月と花の定座くらいしか知らず、また、酒の上でもあったから、ものすごいスピードで乱暴至極な連句を仕上げた（僕はこれを半可仙と名付けた）。しかし、その乱暴な丁々発止の面白さが、杉亭さんに連句への強い傾倒を呼び起こしたのは、怪我の功名のようなものだ。

やがて杉亭さんは斯界の碩学、東明雅師に入門、蕉風にのっとった研鑽を重ねられ立派な捌き手として立つようになられた。その句風はあくまで正格でありながら、底にやや江戸風の軽みを帯びる。杉亭さんは尾張の人だが、大藩の江戸留守居役という、いとも風流な役柄にაცოგれておられ、江戸趣味の持ち主なのだ。あるいはまた、名の似ている杉山杉風にあやかるお気持ちがあるのかもしれない。また、悠然たる気風は犬山の人、内藤文草をも思わせる。

この度の立机のこと、まことにおめでたい限りで、僕のような相変わらずの半可通から見れば眩しいようなことだが、一層のご研鑽をと念じ蕪辞を連ねた。

杉亭さんは老後の鑑

木 村 聖 哉

(猿楽座)

杉亭さんが私たちの句会（猿楽座）に初めてお顔を見せられたのは一九七九年八月、岐阜県郡上八幡への吟行の時でした。まだ会社勤めをしておられた頃です。

以来、杉亭さんは俳句・連句に取りつかれて、正式に勉強をされ、定年退職後は句作三昧の生活に入られました。見事な老後だと思えます。

私たちの句会ほどの結社とも関係がなく、毎月一回焼酎を呑みながら雑談を楽しみ、やおら句を作って遊ぶといふかなりいい加減な会です。傾向としては有季定型が主流ですが、シュールな句や山頭火もどきの句を詠む人もいます。そこへいくと、杉亭さんは全くの正統派で、いかにも俳句らしい姿の、いい句をお作りになる。

ガウディの巨塔かすめる冬鷗

この句は数年前、猿楽座の年間最優秀句に選ばれました。私も大好きな杉亭吟です。

但し、御本人は俳句より連句のほうが得意だとか。たしかに句の付け方など抜群にうまいですね。

今回、東明雅先生から連句の免許皆伝のようなものももらわれる由、まことにおめでとうございます。どうか喜びの余り、御酒が過ぎませんように――。

宗匠庵怪桃・贊

「徳」の人 和子さん

近松 寿子
(次の会)

或る正式俳諧の座で、きりりと美しい式田和子さんに見とれたことがある。つい先刻まで開会前の慌しさの中で他の連衆の帯や袴の着付をまめまめしく手伝わられての後だった。

和子さんとはあまりお会いする機会は無いのにな、えば何時も大きな励ましを頂くような気がする。

昭和六十三年四月、連句懇話会関西大会の前夜祭席上、その日の俳蹟めぐり等を殊のほか喜ばれ、同行の猫蓑会の諸雅を紹介しながら「こんなに楽しい会なら次回はもっともっと猫蓑の連衆を大八車に乗せて大挙して参加します」とユーモアたっぷりのスピーチで拍手喝采を受けられた。司会・世話役で大童だった私は疲れも吹き飛ばし思いだった。平成元年九月の新庄大会では、指定のバス1号車へ急ぐと、それは猫蓑の皆様が大勢のバスだった。遠慮がちに乗り込むと和子さんからお声が掛った。「寿子さん、巻いている連句が丁度花の座なの。明雅先生も賛成して下さったし、さ、花を」と巻き進められていた懐紙を廻して下さった。茨の会から同行の清水一與は続けて挙句を付けさせて頂き、連句は初心で他の会との交流も初めてだったのに猫蓑の皆さんとはすっかり仲良しになってしまった。

和子さんは得難い「徳」をお持ちの方と思う。その和子さんの栄ある立机を心よりお祝い申し上げる。

智恵袋

品川 鈴子
(ひよどり・白燕)

式田和子様は江戸情緒そのもの。――優雅で、粹で、繊巧、洒脱、そして斬新。関西者には及びもつかぬ気風よさ等々。――その方が猫蓑会初回の立机を許されて、江戸時代より栄ある伝統にふさわしい。彼女こそはおのずから女宗匠の風格を備えて居ることは、数ある著述からもうかがい知れる。「……幼い頃、先人からしっかりと教え込まれた暮し方は、身体がビシッと覚えていて……手を動かした時代の血の因果が必ずあると信じます」と、或る序に述べている通り、佳き習慣や躰をさらりと身につけて居られる。

そして、こと正式俳諧式などあれば、すすんで裏方に廻り、誰彼の和装の着付やら、袴の紐の飾結びまで、苦にせず一手に引受ける。その上当人は、手早く端正に紋付袴を召して、執筆の大役を堂々とやっけてのけられる。

真の才女は、相手を気詰りにさせない。其後執筆役を式田様に見習い、私もさせて貰ったが、その折には、病後のお体をいとわれず着付はじめ万端をお世話下さった。小心的な私は、あがらぬため連句マスコット（東先生と初対面の日に拾った小人形ゲゲのキタロ）を袂にひそませた。それがふと転がり出たのを「見ちゃった、見ちゃった」と、おどけてなごませてくれたものだ。刀自というよりは、ゆかしい智恵袋と呼びたい。

新宗匠挨拶

立机式・容と心かたち

秋元正江

A C Cで加藤楸邨先生に七部集の講義を伺い早速数人で実作の真似ごとで二巻を巻いたのが連句の出会いで、東明雅先生の連句講座が開かれて以来十年余、連句と共に過してきた歲月でした。

この秋の芭蕉忌正式俳諧で執筆をつとめられた久美子さんは、その出から硯を捧げて席に戻られる迄、一幕の張りつめた舞台を見るようでした。容は修練と工夫の積み重ねの上にあるもので、それに心を添えられて、存じ上げてない部分の久美子さんを引き出して見せて頂けたように思います。立机式は、執筆、宗匠のお役と共に遠い古典の世界のことでしたが、この度ご指導頂きました明雅先生から頂けますことは、生涯の喜びでございます。これからも一層精進してまいりたいと念じておりますが、連句を巻きますひとときは、容ない人生の最良の喜びではないでしょうか。

立机挨拶

杉江杉亭

私と連句との出会いは十数年前、畏友水沢氏との新宿のバーの止り木から始まった。半可通の半可仙は苦吟数刻、水戸天狗党が出たかと思へば天の夕顔の面影付あり、客気に逸った付けの数々は今から思へば汗顔物ではあるが貴重な記念作品として今も手許にある。

昭和五十七年会社を定年退職し、一自由人として朝日カルチャーの「連句入門」講座に入り東明雅先生とのご交誼が始まった。

某年某月先生のお伴をして調布に赴き歌仙一卷を巻いての帰り途、小料理屋でまた一卷、今回は一時間で巻きましようということになり、先生を捌に男女六名の連衆、必死の形相物凄く一時間五分で満尾。その時、声あり「先生これはギネス物ですね。」あの頃先生もお若かった。連衆もまた。今度立机式を挙げて頂くに際し、東明雅先生を始め諸先輩の方々のご協力を深謝し、これを一里塚に精進に励む所存である。

EN・えん・縁

式田和子

「あなたもA C Cに十年通ったから」明雅先生はお電話でこう切り出されまして、私は心臓がひっくり返りました。

「もう、こなくともいいよ」
「だってどうしよう——」
それが思いがけない立机の有難いお話でした。

よく、連句の「れ」の字も…などと申しますが、連句・れんく・RENKU。この「れ」の字の「れ」に至らない「R」を字ぶのに十年かかりました。ですから、もってお習いしないと困るのです。せめてあと十年かかって「E」の字までいって、もう十年生きていたら「N」までいきたい！これが私の願いなのです。

連句とのへ縁でこそあれ未かけて(蘭蝶)約束習い句を磨きたい、との願いを新たにされた立机のご沙汰でございました。先生始め皆様、どうぞENまでお導き下さいませ。有難うございました。

恋句の作り方味わい方

東 明 雅

一 連句の本質としての恋句

連句の歴史を溯って行くと、歌垣(嬭歌)というものに到達するというのが、学界の定説である。

歌垣は古代、春・秋、季候のよい時、若い男女が山野に集まって、互に歌を詠みかわし、舞踏して遊んだもので、常陸風土記にある筑波山の嬭歌など、最も有名である。

もともと、筑波山は伊邪那岐命を祀る男体山、伊邪那美命を祀る女体山から成り、関東から遠望して向って右が女体山、左が男体山で、この男体山の南下に連歌岳があり、日本武尊と火焼の翁の間に交わされた。

新治、筑波を過ぎて幾夜か寝つる

かがなべて夜には九夜日には十日を
の応答が、連歌の始まりと言われ、以来、連歌を「つくばの道」というようになった。

さて、この筑波山にある和合の神、縁結びの神である筑波神社の後ろに、「嬭歌」の地が今も残っていて、古代の倂をしのばせるものがある。

常陸風土記によれば、嬭歌の夜、男から妻どの印を貰わぬ娘は、女の中に入れないと書かれている。嬭歌の夜は一種の集団見合、集団結婚の夜だったのである。

ところで、この嬭歌における男女の歌のかけ合いは、言語(歌)に霊力を認める、いわゆる言霊(ことだま)の思想がその背景にあった。相手から歌を言いかけられた場合にそれに答えられなかったり、答えてもうまく答えられなかった場合には、その相手に従わなければならなかった。それで男女ともに、全身の智力・気力で、即興に相手に唱和し、相手を屈服させることが必要であった。たとえばおのころ島で天の御柱をめぐって行なわれた、伊邪那美・伊邪那岐。二神の唱和、

あなにやしえをとこを(ほんにまあよい男よ)

あなにやしえをとめを(ほんにまあよい女よ)

などは、その典型的なもので、この唱和は5・7・7、

5・7・7の片歌の型式をもっている日本武尊と火焼翁の唱和よりも形が古いから、これこそ連歌の祖であるという説もうなずかれ、また、恋の句が連歌の根元であり、中核であるということも、納得されるであろう。

後に連歌の形式が定まり、百韻の式目が定められた時、

二条良基(一四二〇〜一四八八)が、

春 秋 恋 已上五句

恋の句只一句にて止む事無念

と定めたのは、春・秋にならんで、恋を最も重視する思

想のあらわれであり、恋句を一句で捨てず、必ず二句以上詠むというのは、例の歌垣において、恋句を詠みかけられた場合には、必ずこれに答えねばならないという言葉の信仰が、良基の時代にも残存していたことを示すものであり、この伝統は言霊の思想が忘れられた今日までも、重要な式目の一つとして、現代連句の中にも残っているのである。

元来、連句はその題材として、天地万物・森羅万象のすべてを詠みこむわけであるが、花鳥風月の自然の描写より人間の存在・人間の関係、そして人情の機微を詠うところにおもしろみがあり、重点が置かれている。

恋はその人情の中で最も深刻であり、かつ華やかであり、また興味のあるものであるから、連句一卷の中でも、中心となり、いわゆるヤマ場を作ることが多い。連句の一座において、表六句が終って裏に入り、そろそろ恋句が出かかる処になると、連衆の気持が頓に昂揚して、出勝の席ならば、皆が争って出句し、一座は急に盛り上がってくる。

このような経験を持たれた方は多いだろうが、これも連句の祖である歌垣の昂奮の名残が、我々の血の中に残っているからに外ならない。去来抄に「恋の呼び出しの句が出される、相手は恋をしかけられましたと挨拶して、恋の句を出すことになっていた」というが、これも、はっきりと連句の恋の句、そして連句そのものが、歌垣の伝統の上に立っているという証拠である。

二 お手本としての芭蕉の恋句

芭蕉の恋句は、現在残っているものだけでも四〇〇前後あるが、それら芭蕉の恋句の性格を最もよくあらわした付合がある。

さまざまに品かはりたる恋をして

凡兆

浮世の果は皆小町なり

芭蕉

これは元禄三年（一六九〇）に作られ、「猿蓑」の中にも収められた「市中は」の巻に出ている有名なものである。この付合が芭蕉の恋句の性格を見事に表現している。

それは、まず第一に、芭蕉の恋句は、すべて、「さまざまに品かはりたる恋」を述べたという点である。貴族の姫、御所勤めの女房などから、人妻・尼・織女・農家の娘・炭焼の娘・商家の腰元・問屋の下女・さては遊女、乞食女などいたるまで、貴賤上下、ありとあらゆる階層の、さまざまな境遇・年令・氣質の女性たちである。

これらを取り上げ描いている点に、彼の恋句の第一の特色がある。

次に、芭蕉の文芸における究極の立場について、彼の門人服部土芳は「三冊子」の中に、「師の曰く、乾坤の変は風雅の種なりと言へり」と述べられている。乾坤の変とは天地・自然、万物の変化、流転する相で、これが俳諧の種（素材）だといっているのである。とすると、人間の愛欲・煩惱の諸相を写す恋の句も、つまりは乾坤の変の一つであり、女性が生まれ、盛りの年頃になり、さまざまの体験をしたあとで、やがて年を取り、老い衰えて死んで行く、それも変化・流転という点から見れば、花が咲き、木の葉が茂り、

やがて散ってゆく、飛花落葉の無常の相と全く変わるところがない。そして、花や紅葉が美しければ美しいほど愛惜の情が深いように、女性が美しければ美しいほど、その哀亡に対する感慨も深いもので、その哀憐の情をさりげなく句にあらわすところが「しおり」なのである。

「浮世の果は皆小町なり」という句は、女性すべてに対する深い同情と愛惜があふれ出た「しおり」の句であると言つてよい。そして、この溢れ出る哀憐の情によつて詠まれる恋句は、興味本位なおもしろ、おかしな心をもつて恋の諸相を詠んだ、あるいは恋の詞だけを集めて作られた貞門・談林時代の俳諧の恋句とは違って、どのような卑俗な、あるいは好色的な素材を詠んだものであつても、その裏に深い感慨・観相がひそみ、「あわれ」・「しおり」が読む人の胸を打つのである。この「しおり」（おのずと滲み出る哀憐の情）が、芭蕉の恋句の第二の特色なのである。

のた打猪の帰る芋畑

賤の子が待恋習ふ秋の風

山の猪が夜になると出て来て芋を喰ひあらし畑にころげまわつては帰つて行く、そのような辺鄙な山里、過疎地帯に住む村娘の恋を、その生活環境に即して描いているが、彼女の恋人はなぜ現われなかつたか、それからその娘はどくなつたか、それらをいろいろ想像すれば、優に一篇の小説を書くことができるだろう。

あやかに煩ふ妹が夕ながめ

あの雲はたが泪つつむぞ

路通

芭蕉

越人

芭蕉

註釈書の多くは、この付合を源氏物語の夕顔のおもかげと見ている。芭蕉の恋句には、このように、源氏物語など、その他平安時代の物語のいろいろな人物・場面が取り入れられ、恋の描写・感情を複雑にしている、そこには平安朝物語文学の「艶」とか「物のあわれ」などが感じられる。

以上、二つの例を通して考察したところだけでも、芭蕉の恋句は、貴賤・上下、さまざまの時代・階層・境遇の「さまざまに品かはりたる恋」を素材として取りあげ、これを述べるもので、いわば、それは恋の諸相の叙事化であり、恋を物語化し、小説化したものと言つてよいであろう。

連歌・俳諧における恋句の源流は、大体新古今集の恋歌あたりにあるというのは、もともと百韻連歌の形式が定まつて来たのが、この平安末から鎌倉初期のころと考えられるからそれは当然かも知れないが、それだけではなく、当時の歌人の影響もいろいろの面であらわれている。俊成の幽玄・定家の有心体、それらは正徹から心敬へ、心敬から芭蕉に伝わっている。たとえば定家の云う親句・疎句という考え方が、芭蕉では余情付、（句ひ、うつり、ひびき、位）となつてあらわれたと私は考えている。

しかし、このように、平安末期の恋歌の伝統を取り入れて、「艶」の美を完成させた芭蕉の恋句も元禄三年あたりを頂点として、変化してゆく、それは「おくのほそ道」の旅の中で彼が考えた「軽み」という手法（日常の具象化を通じて人生を表出する手法）が、恋句の中にも浸透してくるからである。もちろん、「さまざまに品かはりたる恋」

を取り上げて、その諸相を描くという基本的態度に変化はないけれども、今まで親しかった古典の世界・和歌の世界から離れ、今度は庶民の生活の中からさまざまな恋を拾い上げようとする。俳諧は「新しみ」が生命で、俳諧師は常に「新しみ」を追求しなければならぬ。芭蕉が「軽み」を提唱したのも、この「新しみ」を求めてのことである。

ふすま摺んで洗ふ油手

嵐蘭

掛け乞に恋のこゝろを持せばや

芭蕉

上おきの干葉刻もうはの空
馬に出ぬ日は内で恋する

野坡
芭蕉

このような晩年の彼の恋句は、題材・表現ともに、庶民の生活・用語をそのまま取り入れ、全く俗の世界であり、好色的な要素もある。これが「軽み」の世界の恋である。

その市井における「さまざまに品かはりたる恋」を取り上げながら、それを乾坤の変と見、飛花落葉と観ずる精神が背後に存在した。同じく、町家の腰元、宿屋の下女、それらの恋を描きながら、談林俳諧が、「おかし・なぐさみ」と見たものを、蕉風俳諧では、「あわれ」・「しおり」(人間を哀憐をもって眺める心)の心をもって眺めたのである。芭蕉は晩年、このことを「高悟帰俗」という言葉で表現している。

右の付合も表面的には、いかにも野卑・露骨である。しかし、芭蕉はこの野卑・露骨な恋を描くことによって、この馬子の全生活を描し、そこにユーモア、「あわれ・しおり」をも感じさせているのである。

三 現代恋句の作り方

次に私は根津声丈先生から教えていただいたものをもとにして、現代連句において恋句を作る場合の心得について、すこしお話ししてみたい。と申しても、大体は今まで話して来た芭蕉の恋句から外れたものではないが、その前に一つ考えなければならぬことは、芭蕉の時代からまさに三百年、その間、社会・文化の変化は大きく人々の恋に対する意識もまさに百八十度転換していることである。

芭蕉の住んだ封建社会は、その制度維持の目的から、男女の自由な恋愛を否定し、男性支配の下、女性を家庭内にしばりつけ、女性は子供を生み、それを育てる道具として、一個の独立した人格として認めていなかった。

明治以後、ことに第二次大戦以後、旧い社会とともに残存していた封建的思想が打破され、民主主義の名の下に、個人の自由・平等の権利が拡大され、恋愛・結婚は自由となり、最近では女性の社会進出とともに、その力強さ・逞しさが目立って来ている。

芭蕉の時代には世の常識であり、良識であったものが悉く否定された。「不義はお家の御法度」・「男女七才にして席を同じうせず」・「かよわきものは女」・「女は若い時には親に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従う」・「女三界に家なし」・「貞女二夫にまみえず」とか、さまざまに言い古されて来たものが、現代では全くナンセンス、あるいは逆になって来た。

江戸時代の恋愛には、常に罪の意識がつきまとい、それを敢てするところに、あわれが生まれ、しおりがつきまよったのであるが、現代では恋愛には罪の意識はなく、個人の快樂となり、あわれ・しおりも影をひそめたかに見える。

しかし、昔から言われている「恋の本意」に、恋の本意とは人を恋ひあくがれて、及びがたく、叶ひがたく、身も玉の緒も絶え入るやうに思ふ心を本意とす。男女たがひに其心なり（産衣）

とあるように、時代・社会がどんなに変わろうとも、異性を慕い、あこがれる男女の真情は不変で、これは人間自然のものである。

徒然草には、
「露霜にしほたれて、所定めずまどひ歩き、親の諫め、世の謗りをつゝむに心の暇なく、あふさきるさに思ひ乱れ……」

という恋の至情は現代でも、そのまま通用するだろう。社会的な時代のなものも違っていて、その本質は変化しないから、やはり「しおり」や「あわれ」を見出す場所も多いただろうし、「軽み」の句だって、作るには事欠かないのではなからうか。

そこで、芦丈先生の恋句に関する教えの第一として、先生が山褌二十号に掲載された問題を取り上げることにする。

①男が女の自の句を作ること

篠の屑家も住めば愛の栖

洞光

肥桶の片棒かつぐも嬉しげに
この付句ははじめは「嬉しくて」であったが、それでは女の自の句になる。男が女の自の句では蕉風の埒外のものだから一直他の句にした。

即ち、これは恋句には限らぬが、男性が、女性の自の句を作ることはいけないと言われるのである。この問題を取り上げて論じたのは管見によれば杉内徒司氏で、氏は「季刊連句二十号」でこのことを取り上げられ、

あの月も恋ゆへにこそ悲しけれ

翠桃

露とも消えぬ胸のいたきに

芭蕉

冬至の縁に物おもひます

土芳

けはへどもよそへども君かへりみず

芭蕉

などの例をあげて、芭蕉も女性の自の句を付けているから、自分が今まで女性の自の句を作ってきたことに安心したと述べられ、さて、芭蕉が女性の自の恋句を作ったのは、その当時、連衆として俳諧の座に連なる女性の数が現代に比し、極めて少なかった為であろうと推論され、そして、現在では、「一句の主人公は常にへわれ√でなければならぬ」という波郷の言葉に従って、このような性の倒錯は不可とする説に傾いていると述べておられる。これはまことに妥当な結論であるが、そもそも自分以外のことを自分自身のこととして詠んではならないという教えは、去来抄の中に

玉祭うまれぬ先の父こひし

という句を詠んだ作者に対して、去来が下している。これももし、他人のことを自分のことのように詠めば、悪くすると害を招くことになるうと言っている。この句の作者は実際はつい最近その父を亡っているのに、この句だけから判断すると、いかにも母が作者を懐妊中に父は死亡したかのように解されるからである。

このようなことが、芦丈先生の性の倒錯論の根拠となっているものと思われる。今は男女平等の世であり、差別をつけるのが悪いと言われるかも知れない。たとえば、流行歌なども、女性歌、男性歌の区別も次第になくなって御時世である。

ただ、やはり、どうしても気持が悪いので、男性が女性の恋句を作る時は、それを他の句に出来ないか、一応考えて、どうしても出来ないというならば、自の句でも仕方がないだろうとこう考える次第である。

②三句以上、恋句が続く時の処置

恋句は必ず二句以上、五句まで続けてよいというのが式目である。大抵の場合、恋は二句で終り、五句まで続けるのは「恋づまり」と言われて嫌われるということになっていく。しかし、一卷が盛り上がった場合には、難しい恋の句を四句も五句も続けるのを例の「逆茂木」と言って、興味あることとしている。

たとえば、次は「新炭俵」の「落葉搔く」の卷ナオの四句目からの一連である。

- a 風呂飯寝ると言ってみたいよ 淳子
b 友とする座敷わらしに雪女 淑子
c たれ目うけ口それが魅力で 正江
d 披露宴新郎妊婦しづしづと 好敏
e 「敬天愛人」扁額の文字 正江

aは一句には恋の意はないものの、何か恋句を誘っている。これが恋の呼び出しである。

一座でこのような句が出されると、次の付句では、はっきりした恋の句を詠むのが望ましいとされ、(前句、恋とも恋ならずとも片付がたき句ある時は、必恋の句を付て、前句ともに恋になすべし、三冊子) bは「雪女を友とする」で、はっきり恋の句になっている。

cは前句の雪女のアシライの句で、雪女の容貌を述べているのであるが、dは一転して新婚披露宴の景となった。近頃は結婚式の時はすでに妊っている新婦が多いそうで、新郎新婦をもじった新郎妊婦は、世相に対する痛烈な皮肉であるが、一方、大きいお腹を一生懸命かくそうとする花嫁の姿は、考えようによっては何か「あわれ」である。eは恋離れ、表面的には、ただ扁額の文字を示して、一句だけでは恋の意はないのであるが、前句と続けると、結婚式場の一景となる。しかも、この文句に西郷南洲の遺語を引いているのも、味があり、恋離れとして上々の句である。

この一連を見ると、aは自の句、bは向付の自他半の句、cは他のアシライ(雪女の容貌を叙べた)、dは他で其人の付け、eは場の句(人情無し)で、其場の付けとなるで

あろう。このように、自他場をちゃんと振り分けると、三句、四句、五句と恋の句が続いても、境目が次々に変化して、転じが利き、一続きのそしりを免れることができる。

③ 恋の二句目で笑わせる

芦丈先生の口癖に、「恋の二句目で笑わせる」というのがあった。これは真面目なしおらしい句ばかりでなく、ふざけたおもしろい、時には人が吹き出すような滑稽な恋句を作れというわけであるが、その二句目とはどんな所か。歌仙では大体、裏と名残の表の二ヶ所に恋句を出すのが普通であるが、大体において、裏の恋句は穩かに、名残の表の恋は濃厚で、盛り上がり、一卷のヤマ場になるような句を詠むのがならわしである。だから、人を笑わせるのは、大体名残の表の恋句が多い。

そして、一ヶ所しか恋が出ない場合には、二句のうち後の付句となる恋に、おもしろい滑稽・諧謔の意を含んだものを出せということらしい。芦丈先生の作品を読んでも、昭和三十一年の「裏鳴戸」の巻では、裏が、

姑ウラの気にも入りし後添

乱箱衣桁ウラと狭い閨ながら

という、わりにじみな恋句であるのに対して、

撥オモさし置いて老妓さゝやく

うなづきはしたが皆までよめぬ文

という、おもしろい恋句が名残の表に出ている。三味線の撥を置いて老妓が何かひそひそと囁く。相手の男は、何が

一海

芦丈

芦丈

一海

書いてある手紙か読めないのだが、それをかくして、いかにも読めたような顔で点頭しているという、おもしろい恋の句で、滑稽であり、また、字が読めないのをかくして苦勞しているさまにはあわれもあるではないか。

このように、人を笑わせ、楽しませるのは滑稽であり、諧謔であり、たしかにそれは連句の最も重要な文芸性であった。

もともと、連句は「俳諧之連歌」と呼ばれていたものである。これは滑稽な連歌という意味である。連歌は初めは滑稽から出発したのであるが、時代を経過するにつれて、真面目で高雅な文芸になってしまったので、滑稽を主とする連歌は格式の低いものとして取り扱われるようになった。それが後には「俳諧」と呼ばれ、連歌と対立する別のジャンルになったものである。「俳諧」となってからも、また、連歌に近づけ、品のいいものとし、且つ教訓的なものにしてよとしたのが松永貞徳である。それに対して西山宗因は滑稽と俳言に重点を置いて、自由な俳諧を作ったので、その弟子たちは放埒に流れ、無政府状態になった。そこに現われたのが芭蕉である。

上おきの千葉刻もうはの空

馬に出ぬ日は内ウラで恋する

野坡
芭蕉

「馬に出ぬ日は」のはの字の中に、この馬子の生活が、馬に出さえしななければ、必ず「内ウラで恋する」事にきまつているような、事の反覆、もしくは習慣を示唆する特別な意味が籠められ、そこから又作者がこの馬子を取り扱っている

る、フモールも湧いてくる」と小宮豊隆氏が述べておられるように、ただ笑わせるだけではない、笑いの中にしじみとしたもののあるユーモア・ペーソスが見られる。

諸謹は、詩の最高理念である。

四 現代恋句の鑑賞

忘れたき人忘れ兼ねるて

きよみ

王冠を賭けし世紀の恋もあり

魚魯

ミンクのコート露地を抜けゆく

芹川

小出きよみさんは、昭和三十八年から、根津芦丈先生に連句を学び、信大連句会のメンバーの一人である（現在は花野連句会）、昭和五十七年に「恋句曼陀羅」という本を刊行された。これはきよみさんを中心に、当時の信大連句会で作られた歌仙の中から、恋句を抜萃されたもので、現代連句の恋句で特筆すべき傑作が多く掲載されている。この「恋句曼陀羅」を除外しては現代の恋句は語れぬであろう。

芦丈先生も、この一連に対して、「近頃出来た恋句で、いささか誇るに足るもの」とされ、「此前句は、英国の皇室にての出来事で、誰もが知り過ぎる程の事実である……このように何物を捨てても惜しくないという心情はみな一つである。この前句に対して、「ミンクのコート露地を抜けゆく」心憎いほどの付味である。……と絶賛しておられる。思うに、この恋句は、その用語・措辞の堂々たること、まことに丈高い句であるが、もともと、「世紀の恋」とか、

「王冠を賭けた恋」とかは、新聞などにもよく使われた、いわば慣用語であろう。しかし、これらよく目についたものを纏めて一句としたのは、この作者池田魚魯さんのやはりお手柄であり、昭和も四十年代に入って、漸く新しい現代連句の恋句が生まれたと言いうことができよう。

これに対する田淵芹川さんの付句は、王冠とミンクのコートがよく位付になっていて、しかも、このミンクのコートが露地を抜けて行くという所に、この女性の姿を想像させ、「あわれ」と「しおり」がある。魚魯先生の句は芹川さんの付句を得て、初めて光りを放つことになるのである。既に述べたように、俳諧の恋句は、前句と付句二句で、小説を書くのであるから、言葉の使い方、場面の切り取り方が特に大切である。そして、何より大切なのは新しい感覚であろう。新しい我々の作品から例をあげる。

青道心の襟元の艶

明雅

気がつけばあれが初恋初袷

孝子

秋祭り俄氏子のかしこまり

杉亭

雑沓まざれ嫂の瞳よ

正江

過ぎし恋歪んでダリの絵のやうに

千町

ただ、詩の最高境地である諸謹の境地はなかなか到達出来ないが、たとえば、

女ざかりの五十ウンオ

遊

ヒモはなしせて頭の毛が欲しい

清子

などはいかがであらうか。

(未定稿)

第十一回 俳諧 芭蕉忌

第三十九回 猫蓑会

式田和子 捌

恒例の芭蕉忌を十月十六日（水）深川芭蕉記念館で修し、正式俳諧を厳肅な中に和氣藹々と興行した。その後、二十韻八巻を首尾した。参加者 三十八名

第一部 正式俳諧興行 「冬籠り」 一卷

第二部 二十韻八巻

役割

宗匠	式田和子
脇宗匠	豊田好敏
副宗匠	内田麻子
執筆	副島久美子
知司	佛淵健悟
副知司	雑賀遊
座配	小林千雪
座見	下鉢清子
花司	上月淳子
香元	市野弘子
配硯	若尾よしえ
同	橘井文子
同	岩井啓子

二十韻 冬籠り

先祝へ梅を心の冬籠り

しみじみたのし炬を開く頃
シンセサイザー嫺々として響くらん

ボール見つけて抱へ来る児等

大学祭月見の宴もたけなはに

雁が渡ると指をさす君

るのこづちつけたるままに抱き合ひ

教条主義のもてぬ世の中

何事ぞ右往左往の赤棟蛇ヤマガサ

銀行マンに黒鼠ふえ

傘かしげやさしく老の手をとりて

写真集めし土門拳館

蚕の神にだんご供へて麓村

焦がれ焦がれてやっと逢ひたり

汗しとど月の入りしも気がつかず

体温計のデジタルの文字

住所録また一本の筋をひき

地酒とろりと霞喰ふひと

迎陵頻南都舞楽に花の散る

旅も果つれば深みゆく春

明雅 好敏 淳子 清子 麻子 弘子 健悟 郁子 啓子 千雪 文子 よしえ 道子 志げ子 利子 雅代 和子 執筆

初しぐれ

篠原 達子 捌

寒菊や

瀧川 雅代 捌

口切に

八角 澄子 捌

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也

つづら仙道もみぢ散る頃

園児らはピアノ連弾楽しみて

手作りケーキ上々の味

窓越しの月と乾盃誕生日

くんち若衆に贈る印籠

蚯蚓鳴くあたりへそっと誘ひ込み

消費税までダッチ勘定

隣りから金槌借りるしわん坊

おふくろさんよここが東京

黄鵠のそれきり鳴かず来る静寂

原爆忌なりロザリオを繰る

乞食をつづけ俳聖山頭火

川は流るる恋も流るる

ナナハンにしがみつつくゆく寒の月

停年亭主肥えてこまるよ

遺言に生体移植と筆太に

釣上げるたび捨てるごんずい

新しきダムに散り込む花吹雪

五色ひろがる夢の風船

翁

達子

清子

治子

美津

和子

清

和

美

治

和

美

清

美

清

和

治

清

達

治

寒菊や粉糠のかかる臼の端

小春の土に餌をつつく矮鶏

青海原遠く帆を張る人見えて

画帳とり出しスケッチをする

飾り窓シテイホテルの望の月

時代祭で逢初めし仲

榎椀の甘き香りを分かち合ひ

テレフォンカードなつかしき山

角笛が響き羊の群が行き

やたらに国の増えるこの頃

先々で大受けをする力士達

三LDK当てし籤蓮

幽霊が月の光の蚊帳ごしに

妻ならぬ女髪洗ひをり

手切金涙でもらひ次の恋

両刀づかひ酒とまんじゅう

今生にありし火の色水の色

雪解けみちが駅の先まで

中辺路の古き熊野に花の舞ふ

子とたはむれて遊ぶ蝶々

翁

雅代

千町

啓世

文子

よしえ

町

世

え

町

え

子

子

町

子

代

世

町

子

世

口切に塚の庭ぞなつかしき

掃き終へしよりこぼすざんか

三々五分校の子の帰るらん

テレビに映るロボットの腕

見て貰ふ占ひの卓照らす月

踊りの輪にてわざと踏まれし

ちちろ虫はたと鳴きやみキスシン

大火碎流またも噴き出す

証券の店頭けふも閑古鳥

ヤケノヤンパチ喰らふラーメン

ダンボール見やう見まねの氷下魚釣

弦月冴ゆるさいはての地に

若い娘の骨に張切る接骨医

あとを引く恋追って追はれて

愛犬と豪華客船夢の旅

ナイルにまみゆ黄金の面

御秘蔵の長寿の酒を酌みかはず

はなだの空の春の薄雲

墨染の尼も浮かれし花の舞

もっともっとと作る草餅

翁

澄子

杉亭

啓子

郁子

同

亭

澄

亭

啓

同

亭

郁

郁

啓

郁

啓

亭

澄

啓

郁

しぐれ哉

本屋 良子 捌

冬籠

山口みづゑ 捌

新薬の出初めて早きしぐれ哉

帰り支度のせかる冬の日

遊覧船舶先に声の弾むらん

箱弁当を配る当番

パンコンの調子たしかめ月の窓

オカリナ吹けば揺るるコスモス

秋恰今も焦がれるその瞳

魔風恋風ところ嫌はず

永田町総裁劇の浮き沈み

引越し荷物部屋に積み上げ

ビール飲むごろ寝の顔を猫が舐め

月の山脈郭公の声

教会に額づく少女はにかみて

宮沢りえは大胆に脱ぐ

旗立ててホモセクシャルに市民権

葉がらみの株が上るよ

ふらふら流行りし頃の輪をみつけれ

跳び出す蛙よけてポストへ

大門の飾灯笼花に頭つ

三三五と子等の踏青

冬籠りまたよりそはん此はしら

耳を澄ませば残る虫の音

江悠々觀光船の止まるらん

ほろほろこぼる洋菓ポロボロ

書終へし二百字詰に月の影

秋狂言の配役は未だ

仕掛けたる年増の恋は忍草

罪つくりだわかうも酔はせて

閻魔さん三枚舌に仰天し

アルファベットの解けぬ謎々

藤寝椅子「それから」はまたそれからに

吹く麦笛に月上り来る

いがぐりの思はれにきびはつぶさない

猫に試しの口づけをして

撮る時は男と女にならなけりゃ

次の次をばねらふ総裁

すべり台お砂場春はもう近く

丘ふはふはと越えるふうせん

花の宴母の形見の紅揆鏝

青きを踏みて来たる産土

☆ 新刊紹介 ☆

『新炭俵』 東 明雅 著

(角川書店 二〇〇〇円)

残部僅少。

購入御希望の方は季刊「連句」発行所

へお申し込み下さい。

(振替口座 東京七一五二一三三)

『房連庵の連句』

内田麻子 著

(むなぐるま草紙社 二〇〇〇円)

内容は二四、二五頁 福井隆秀氏の文章参照。

購入御希望の方は内田麻子氏へ直接お申し込み下さい。

▽216 川崎市宮前区馬絹九九四一―一四

蓑虫

付勝練習二十韻

東明雅

切 句 締 投
日 20 月 1

十六句目 ちよいとそこまですてこの月 ばかり
十七句目 やあ、いよう、はてな名前が出てこない 達子
十八句目

治定 仔猫を抱いて満面の笑み 智子

- 1 雛流しの終る夕暮
- 2 蛤鍋の店で逢ふ人
- 3 木の芽田楽大笑ひして
- 4 雪代山女祖父の釣り来て
- 5 幼稚園児の集ふぶらんこ
- 6 薄墨色に海市消えゆき
- 7 薪能にてばったりと逢ひ
- 8 ビルの上より春の虹立つ
- 9 髭を生やした新入社員
- 10 きしゃごおはじき買って買ってと
- 11 乗込鮒が籠にいっぱい
- 12 とりとめもなき春の夜の夢
- 13 仔猫に合せ嬰のうそ泣き
- 14 朝顔時いて日曜の午后

※よいと思う。⑧この春の虹も蜃気楼と同様に、天象（正確に言えば、気象であろうが、ともに大空にあらわれるものとして）、月にぶつかるのである。⑨新入社員だから、まだ名前が覚えられない。それまでは当り前すぎておもしろくないが、新入社員が髭を生やしているところ、ちよつと変わった滑稽がある。但し、下七が新入社員と四三になつてゐるのがキズである。⑩これは子供がまだ出ていないのに着目されての付けであろう。きしゃごも三春の季語で、小さな巻貝であるから題材としては詭向きであるけれども、やはり前句との付心が問題である。きしゃごを買つてと言つている子と名前が出てこない人との関係がやや不鮮明なのである。⑪これは④と似た情景であるが、これは釣つて来た人が誰か分らない点で、かえつて前句との付味は④よりもよくなつてゐる。⑫夢の中で会つた人の名前が、どうしても思い出せない。このようなことはまゝあることである。だから、前句との付味はよいのだが、夜の字が打越の月にさわるので残念であつた。⑬赤ちゃんが仔猫の鳴声にあわせてうそ泣きをするというのはいささか不自然で、最初に投句された「仔猫ときそふ嬰のうそ泣き」の方がより自然であると思う。珍らしい情景ではあるが、名前が出て来ない人との関係はどうなつてゐるのだろうか。⑭朝顔を時いている時、通りがかりの人が思い出せない。前句との付味は上々であるが、⑯が自の句なので、自の打越であり、また午后は月（夜分）と時刻の打越である。⑰花前だから、この位大柄でゆつたりした句がよいのかも知れない。外の

- 15 笑ふ山々唄ふせせらぎ
 16 山椒和への舌にひりりと
 17 汐吹く浅蜷あたり濡らして
 18 同行二人お遍路の笠
 19 風船飛んで話ぶつつん
 20 雪囲とる村の家々
 21 芝焼く煙低く地を這ひ
 22 皆老人春耕の人
 23 秋田ヤンシュの真黒な顔

① 難流しは外の景であろう。十五句の鳥の群から十六句、十七句と外の景が続いているから、出来たら内に入る方が望ましいし、しかも夕暮は打越の月(夜分)に障る。② 蛤鍋はその点、内に入っており、軽くて花前の句としておもしろいと思った。③ これも②と似た情景であるが、考えてみればこの巻の中に⑤心太をすすりこむ句、⑬には食物そのものではないが据膳の句もあり、いささか食物の句が多くなるのが気になった。④ 雪代山女は珍しい句題であり、魚が一巻にまだないのでその点はいが、前句との付心が気になる。名前が出てこない人と祖父との関係が不明確なのである。⑥ 海市は蜃気楼で天象の一つであるから、打越の月(天象)にさわるのである。⑦ 薪能は五月十一、二日、奈良興福寺の般若の芝で行なわれる。古くは旧二月二日に行なわれていたから、現在も春の季語として取り扱う歳時記もあるようだが、これはやはり初夏の行事とする方が※

景色だという外には欠点がなかった。⑩食物という点では②・③と同じであるが、この句ははっきりと自の句である点がまずい。⑰汐吹く浅蜷はおもしろいが、大打越に出たゴミ袋つく鳥たちと似かよった気分があるのが気になった。⑱お遍路さんの笠には、お大師様と御一緒という意味で、同行二人と書くのである。お遍路さんがやって来た。何か見覚えのある顔だが、どうも名前が浮ばない。よくある情景だし、釈教の句を出したのもよかったと思う。⑲A「うかと離せし風船追ふ瞳」、B「風船飛んで話ぶつつん」、C「空と溶け合ふ飛びし風船」、この三句を投じて来られたがAは下七が語呂が悪いし、Cは空で打越の月に障るし、この中ではBがよいと思ったのであるが、名前が分からぬまま話をしていたのであるうか。付心が不明である。⑳これは無難だが平凡である。㉑これは場の句だろうか。㉒この句には述懐の気分があり、やや暗い気分が続く。㉓おなじみのヤンシュだが、名前は忘れてしまった。このようなことはままあることとおもしろいと思う。さて、治定の句、仔猫を抱いてにこにこ笑いながら来る人がある。ハテ、誰だったかなというところ。㉕あたりから続いた暗い気分を一掃して次の花を迎えるによい句である。これは他の句である。次はいよいよ花の句、前句は他の句、打越は人情自(自他半と見てもよいが)である。また打越は外、前句は内外なしの景と見てよいだろう。このようなことを勘案して、よい句を作って欲しい。

「房連庵の連句」について

福井隆秀

内田麻子さんの瀟洒な袖珍版、「房連庵の連句」が上梓されました。

拝見した感想は、麻子さんがまえがきにも書いておられるように、何故連句するの、と問われたら、躊躇なく連句は楽しいからと答えたい、この一語に尽きると思っています。

小型の本ですが、内容はなかなかどうして、著者の数奇を凝らした趣向が盛られています。

歌仙六卷、二十韻十二巻をメインに、世吉（よよし・四十四句）一卷、歳旦三つ物、それに巖父を回想された短歌二十数首という構成になっていて、巻尾にそれぞれ短いコメントが添えられています。このコメントが要を得て素敵です。

趣向といえば、歌仙のなかに酒の句と恋の句ばかりを鑿めた酒恋歌仙もありますし、世吉は色の賦物（ふしもの）といって、各句それぞれ白とか赤、黒、黄といつて色染めに詠まれている楽しい試みもされています。膝送りもあれば、独吟、文音もあり、

また詠まれた場所も連衆のお宅や、一泊旅行の宿泊先、果てはその宿泊先に至るまでの車中にも巻かれていて、連句って何処でも、こういうやり方でも出来るんだな、と嬉しいサンプルを示してくれてもおります。

では、作品を見てみましょう。

協起り二十韻「山吹散るか」。

芭蕉の、ほろほろと山吹散るか。の発句を立句とした協起りですが、第三の螺鈿の箱に舞っている蝶は、丈高く優雅で王朝絵巻風ですが、そのつぎの、インタールホンで鍵忘れたと、がらりと現代のモダンな雰囲気に変えられた句を採られたのは、捌きの手腕です。

ウに入って、恋の場面ですが、

まはり道してすすき野で待つ

その首尾を猫は語らず温め酒

このとぼけたおかしさ。続いて、

画室で瘦せしモジリアリニよ

古時計止りたるまま玻璃にひび

金一 麻子 明雅

正江

貧困と薄倅に瘦せた数奇な画家のきびしさによる恋離れ、そして永遠に時を止めたひび割れの古時計によって底知れぬ孤独を象徴させた遺句。この辺りの捌きの呼吸は、見事です。

そして、ナオの恋。

ぬけ出して電話を掛けるもどかしさ よしえ

不倫の恋と云ふならば云へ

十六夜の畳におちしへアーピン

証拠物件の抜き差しならぬへアーピン。

まるで近松の「鐘の権三重帷子」に於ける

おさい、権三のあの帯の投げ合いの場面を

思い浮かべますが、と同時に、この句の

へアーピンは身嗜みの髪梳きのとき図らず

も落ちた単なるピンでもあり、前句とセツ

トになれば妖しい恋句ともなり、一句立て

として見れば恋とは縁のない月のさまで、

こころが俳句とは根本的に違う連句の玄妙

さ、騙し絵みたいな摩訶不思議さでしょう

か。

ナウに進んで、

西鶴忌金の才覚あれこれと 千町

ノッポビルから富士を眺める 一

もちろん西鶴と才覚の語呂合せ、言葉遊びによる世相を皮肉っているのですが、この作品を巻いている新宿の超高層ビル四十八階の、教室の窓からはいいままにできる富士の眺望（おそらく赤貧洗うがごときの北斎にしては、望むべくもなかったであろうアングルの富岳百景）このコントラストの面白さを捉えられた捌きの炯眼は、素晴らしい。

また、普通、挙句の前の花の句は、賞美としていわゆる桜の花を詠むわけなのですが、この巻はしよっぱなに、晩春の散る山吹が出ております。そしてまだ冬季の句が顔を出しておりません。

従って、匂いの花は趣を変えて、冬の正花を捌きは注文しました。

河豚汁の宿のひとつと帰り花 雅

あたたかい十一月初め頃、時ならぬ花を咲かせる帰り花、この句を得て、この巻は俄然特異な出来栄となりました。他季の正花の使用可とはきかされてはいるものの滅多に出来ぬだけに、この機会を捕らまえられた捌きの昂りは一人でしたでしょう。

変化があつて、会心の作と思われれます。

続いて、二十韻「春疾風」。

印象に残ったのは、ウ3からの、

酌み交す白玉の酒秋造り

美保

修司・方代天の居酒屋

保

眼なき魚生れつづく海の洞

蓉子

句を接しての酒の同字使用の瑕瑾はありますが、天の居酒屋と水俣の無気味さ、発想の際立った転回に刮目しました。

修司というのは、詩人にして演劇関係の寺山修司。彼は若い頃短歌もやっていて、

一粒の向日葵の種まきしのみ

荒野をわれの処女地と呼びき

マツチ擦るつかのま海に霧ふかし

身捨つるほどの祖国はありや

そしてもうひとりの方代とは、戦傷で魂も傷つき無慙な異端の脱俗歌人、山崎方代。

起きて半畳ねて一畳のあばら屋を

山の桜が咲きかこみたり

ふるさとの右左口郷は骨壺の

底にゆられてわがかえる村

ふたりとも生涯放縦無頼な面があつて、天国にあつても居酒屋でとぐる巻を巻いていることでしょうか、この巻は、長年短歌をやっておられた麻子さんの短歌、連歌仲間

との一座で、美保さんも歌人ですから、修司、方代が出てき、その天真爛漫な無頼さに響いて対照的な地上の荒廃、人災の水俣惨事がすかさず詠まれたものでしょう。捌

きはこの移りを敏感にキャッチされた。恋句はウの日本情緒とはうって変つて、

移民三代ラブも英語で

照代

ヨードルの恋は谷間をかけめぐり

眠れぬ夜に羊かぞへる

蓉

こら辺りのリードも堂に入っています。相撲の全身砂まみれのぶつかり稽古の譬

えではありませんが、稽古充分のACC連衆とは違つて、そう会合も頻繁とはゆかぬ

短歌のお仲間を捌かれて、連句の楽しさ、醍醐味を皆さんに感じさせられた力量に敬意を表します。間違ひなく、作品のなから嬉々とした声が聞こえてきますもの。

他の巻にも随所に、数多の提出短冊のな

かから一句を掬われた捌きの冴えを発見できるのですが、紙数が尽きましたので残念

ながら割愛させていただきます。

ともあれ、この「房連庵の連句」のライ

トモチーフは、ズバリ、連句の楽しさを高らかに謳つたものと言つて憚りません。

歌仙 萩の風

式田和子 捌

飛天 地にて遊ばるる

式田和子

杉並は文士多し

文士街そぞろ歩くや萩の風

釣瓶落しを追ひかける月

秋蘭の小さくしろきを見せ合ひて

我慢の煙草ちよつと一服

棋譜たどる弟子きつちりと膝揃へ

深霜解けて光る庭先

教会のクルスに番寒雀

交換日記に淡い告白

転校にひそと泣きたる君の背

火を吹く獄になすすべもなし

ポンペイの廢墟に遊ぶ猫の群れ

帆立貝積む舟の傾く

三線も泡盛酌むも月の下

へのへのもへじ腹で動かす

新入りの営業マンは無口なり

老母は手紙せつせつと書く

ふうはりと傘に花びらのせしまま

有線放送長閑なる昼

今年また黄金週間夢と過ぎ

うる歯に填めし贋のプラチナ

複製のゴツホ集める相統人

造成地より出たる石棺

熱帯夜羊が五百五百一

年増盛りの熟れた乳房よ

紋々の不動明王剣と索

吊るし切りした鮫鱈で酒

民宿の看板はやや古びたる

畑に出ぬ日はうちで使はれ

髭抜いて名残りの月の句をひねり

スポコン漫画灯火親しむ

運動会バトン渡せし友いづこ

噂ちらほら総理総裁

隣室に携帯電話鳴り続け

男料理のはや弥生尽

爛漫の花に嬰抱く名付け親

あふれる希望山笑ふ朝

平成三年八月十六日 首尾

於 杉並 式田宅

パソコンで連句をなさっていらっしやる

連衆のいらっしやることは「電脳連句で遊

ぶ」(三省堂選書)で知っていました。

この連衆の中に猫蓑の佛淵健悟さんがい

らっしやって、「一巻まいてみませんか」

とのお誘いがありました。「パソコンで連

句している、異次元の世界に迷い込んだ

ような気がする時がありますよ」と、ちら

りとおっしゃいます。フーム。天空を遊ぶ

飛天が地に降りて一座されたら、どんな一

巻ができるでしょうか。蓮華馥郁たる高雅

な地ではなくてお気の毒ながら、天人天女

様には文士多き街に降りて頂きました。地

上でのご一座はお初めてのこととか。外道

鬼面の地と思召すな。取って喰おうとは申

しません。外道とはお神楽で「ひょっとこ」

のこと。捌きをひょっとことお思いになっ

て、まあお気楽に遊ばしませ。

脇、海砂先生。第三、杏奈さんは前記「電

脳連句」のアンナさん。珍らしい題材が出

まして、捌きもほっと一息の四句目。五句目の宗海先生も「電脳連句」の「ヂイ」様ですが、なんのなんの、お若いので「バア」はびっくりしたのじゃ。

(伍)は本が出ましたが、文士に本はちょっと、ということと遊び事の将棋に一直。きっちり座って棋譜を指でたどるお弟子さん、庭前の霜の解けるのも気がつかない熱心さで、表六句を終りました。

教会のクルスに番の鳥。鳥はみそさざいのような小さい可愛い鳥がいいのですが、みそさざいは藪の鳥らしく、寒雀。連衆がお若いので、ウラの(二)には交換日記が出ました。泣かせます。上手く転じて下さって、火砕流で引越しを余儀なくされる別れとし、それがボンベイに見立替えされ、天空からの俯瞰図に猫までいるという芸の細かさにご感服。ウ(六)は海の幸山の幸を積んだ豊年満作の舟が出ましたが、焦点を絞って獲物を具象化したので帆立貝を積んで貰います。豊漁の気分が、ウ(三)・四・(伍)の暗さを転じてくれました。これでは三線(さんしん)を弾き、泡盛に歌も出ようというものです。が、(八)・(九)は本来根暗の「おたく族」新人社員は、たったひとつ、顔を見せないで良

い隠し芸を必死に演じるというコワイ句。そんな息子を案じる母は、せつせつと旧仮名で「おまへさまは……」などと手紙を書くことでしょう。折端でのんびりしましょう。

ナオに入って、こののんびりした気分を引きずっては困りますので「ひょっとこ」がしゃしゃり出まして、虫歯に金属のテンブラを詰めてお見せし、波瀾万丈の展開を誘ってみました。さすが腕っこき。西欧名画を買いあさり、死んだらお棺に入れるなどのたまわれた方の面影がつき、(伍)の寝ねられぬ夜々は金か女か。杏奈さんは女に見立てられました。自他かの議論は百出であります。自他場の釣合い上惜しくも「他」となったのであります。(六)の「紋々」は俱梨伽羅紋々の紋々、刺青のことで、紋々の不動明王ひっかいて

と、痴話喧嘩をとりましたが、(伍)からのベットの続きともとられるやも知れず。手はひっこめて向い付に一直。お不動さんにじろりと睨まれたように首をすくめました。が、剣で吊るし切りの鯨鯨が生まれました。

(十一)、前句は

パソコン通信灯火親しむ でしたが、これがウの(十一)の有線放送長閑なる昼 と同

じ機械を使う景となり、昼夜の違いはありますが気分が似通います。ウ(十一)を

肥風匂ふ長閑なる昼 にととも思いました。が、それでは黄金週間に付き過ぎるし。

パソコン通信はご連衆の居住区ではありましようが、スポーツ根性ものの漫画には「巨人の星」も有り、「アタックナンバーワン」の空中回転も有り、これで我慢して下さい。ナウの折立とややべた付になりましたが、このパソコンを消しましたので、(三)の電話との大打越を避けることができました。

四に、男料理のはや弥生尽 という哀愁ある句も出まして穩かに過ぎていきますが、男ばかり出て来ますと墨絵風になりますので、ちょっと色を挿したいと思ひ、赤子の宮詣りの晴着友禅をイメージしての花の句カラー写真風になりましたでしょうか。

挙句 あふれる希望山笑ふ朝

初めての地上興行の一座。どうなることかと捌きも連衆も持っていた危惧は一巡の頃からすっきり消え、めでたく首尾致しましたので、赤ちゃんもにっこり微笑んでくましましょう。

おめでとうございました。

第三回全国連句新庄大会

平成三年九月十三日(金)・十四日(土)
山形県新庄市 / 新庄市民プラザ

台風が多い今年ですが小型ながら強いとの予報を耳に、新庄行きの車中の人となりました。

明雅先生ご夫妻をお入れして猫菘会は十二名の参加。新幹線工事の都合で仙台で乗り換え新庄駅に十一時二十三分着。途中、盛信亭跡の碑を見て市民プラザの会場へ。

会場では、新庄市の方や北陽社の方達に、再会の思いで迎えられました。東山焼の大壺には薄、秋明菊、コスモスが挿され、殊にコスモスの濃い紅にみちのくの清浄な空気を感しました。

開会のことばを北陽社主幹笹喜四郎氏は、新庄大会は皆様に育てられた会であり、わけへだてなく愉しんで欲しいと云われ、大会会長高橋栄一郎氏の主催者挨拶と募吟表彰、選者講評を東明雅、渋谷道の両先生に終って記念撮影。連句興行は一階大ホールで十二席にわかれやかな雰囲気でした。昨年は県外十八名の参加、今年は四十一名とふえ、総勢七十二名の大会でした。

一行はバスに分乗して一時間の道のりを

今宵の宿若松屋別館六助へ。

肘折温泉は南東に修験の山「葉山」南西には出羽三山の主峯「月山」を控へた山裾にあり、骨折や傷によく効く湯治場へ入込の湯もあると云うおおらかな出湯でした。

山深く霧が多いので山菜はよく育ち、懇親会では山の幸を堪能させて頂きました。翌十四日は朝からの秋霖でしたが、肘折

こけし工人の奥山庫治氏ご指導による、こけし絵付の体験、何しろこけしの頭は丸いのでしっかり抱えて目鼻を描くの的精神集中、何処かで作品は作者に似るとい声もあり、描き終えたこけしに自作の句などを書き纏を塗り布拭きをして完成。

最上川舟下りに参加した方も合流して、市民プラザで昼食。この食卓に念願の茄子の漬物が出たのです。出会いは本合海の翁乗船の地でした。故郷の味の忘れられない茄子です。新庄の皆様の厚いおもてなしと数々のご趣向を心よりお礼申し上げます。

募吟選考は四選者より八篇が選ばれて、猫菘会では「枇杷熟るる」の巻正江捌きが

明雅先生選に入りました。(文・秋元正江)

膝送り半歌仙

ねまるなり秋も盛りのみちのくに

こけしの里に仰ぐこの月

やや寒の紺の緋を仕上ぐらん

ダンブの列のつづく震動

小さき石二三落して詰める沢

遠郭公に葛水の味

練供養菩薩の列のしづしづと

やまとまほるば君追うてゆく

「飾り窓」の出自は仇な下着つけ

雪女棲む蒸し湯の洞

山の月かけ終りたる狐畏

あと十分で着けるふるさと

正式にバルト三国承認し

使母国語出す旧国旗

車椅子老は自在にあやつりて

玉の杯には金箔の揺れ

砂壁に小面の笑む花明り

風船売りのよぎりゆく窓

平成三年九月十三日

やまびこ車中にて

明雅

郁子

清子

正江

徒司

雅

郁

清

江

司

弘子

隆秀

清

和子

淳子

啓世

あかり

千町

連句会案内

＊ 連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時
会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ一ノ三

(電) 三九四一―一四五

＊ 柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時
会場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地
マーケット下車)

＊ A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四水曜 午後一時～三時
会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

(電) 三三四四―一九四一(代表)

＊ 猫蓑会(会員制) 年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)
会場 江東芭蕉記念館

江東区常盤一―六一三

(電) 三六三一―一四四八

雁 帛 往 来

▽十月一日～五日 郷里熊本に墓参。
▽十月六日 関口連句教室。秋元正江・杉内徒司両氏の捌き、二卓。

▽十月七日 俳人協会三十周年祝賀会(京王プラザ)に出席。

▽十月九日 A・C・C。三冊子をテキストに発句・脇について解説。

▽十月十三日 柏連句会。生憎の台風であったが、熱心な方十五名集合され、三卓で二十韻興行。

▽十月十六日 第十一回芭蕉忌正式俳諧興行、終って第三十九回猫蓑会(深川芭蕉記念館)。正式俳諧も回を重ね、諸役の挙措板についての感あり。特に執筆副島久美子さんの美しい動作の流れに感嘆の声があがった。あと八卓に分れ、二十韻八巻首尾。

▽十月十七日 電通連句部出席。

▽十月十九日 第六回国民文化祭、ちば91連句大会の実行委員会が市川市駅前、山

崎バンホールで開催。十一月の大会の諸準備を行なった。

▽十月二十三日 A・C・C。前回に引き続き、第三について講義。

▽十月二十七日 俳諧時雨忌(家の光会館) 詩人安西均氏の講演のあと実作。秋元正江捌にて歌仙一卷首尾。

▽十月二十八日～三十一日。季刊連句第三十五号の原稿書き。整理して岩田印刷に渡す。

季刊「連句」 第三十五号

平成三年十二月一日発行

編集人 東 明 雅
発行人

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二 東方

電話 ○四七一(七五)二一九二

振替口座 東京七―五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277 千葉県柏市酒井根六二六一―

電話 ○四七一(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共
一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に

版 B6判
 三三二頁
 三五〇〇円
 必須の知識をすべて網羅！
 初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
 思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
 景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
 鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
 高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとられず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をストック・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一九〇〇円
国語学会編

国語慣用句大辞典 A5 六〇〇円
白石大二編

国語慣用句辞典 B6 二〇〇円
白石大二編

国語史辞典 B6 二〇〇円
林巨樹他編

日本語語源辞典 B6 一八〇〇円
堀井幸以知編

京都語辞典 B6 一〇〇〇円
井之口・堀井編

擬音語擬態語辞典 B6 三〇〇円
天沼 卓編

隠語辞典 B6 二八〇〇円
堀井 実美編

近世上方語辞典 A5 一五〇〇円
前田 勇編

花柳風俗語辞典 B6 二二〇〇円
藤井宗哲編

明治新語俗語辞典 B6 三〇〇〇円
權島忠夫他編

難訓辞典 B6 三〇〇〇円
中山泰昌編

名乗辞典 B6 二八〇〇円
荒木良造編

名数数詞辞典 B6 四五〇〇円
森 睦彦編

あいさつ語辞典 B6 二八〇〇円
奥山益朗編

新版 ことば遊び辞典 B6 五八〇〇円
鈴木大雲三編

類語辞典 B6 二八〇〇円
鈴木・広田編

類義語辞典 B6 二二〇〇円
徳川・宮島編

表現類語辞典 B6 四八〇〇円
藤原身一他編

新版 文章表現辞典 B6 二九〇〇円
神島・村松編

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2